

## 大正時代盛んだった仙台神楽

全く私は神楽のこと知らなかった、偶然のこと、平成三年七月二一日、郷土研究会の会員実盛雅夫が、中佐呂間駅通の牧場が北区にあるから行って聞いて見ないかと言われ、行って見ようやと言われたので、よし行こうと承諾して行くことに決定したら、実盛が「二人とも運転出来ないから、今度も関東さんにお願ひして連れて行ってもらおう」と言っていて電話してくれた。関東さん心よく引き受けてくれて、三人で、北区の土田シカさん宅に行く、実盛の電話遅らくで、初貝直一さんも来ていてくれた。(駅通牧場別記)

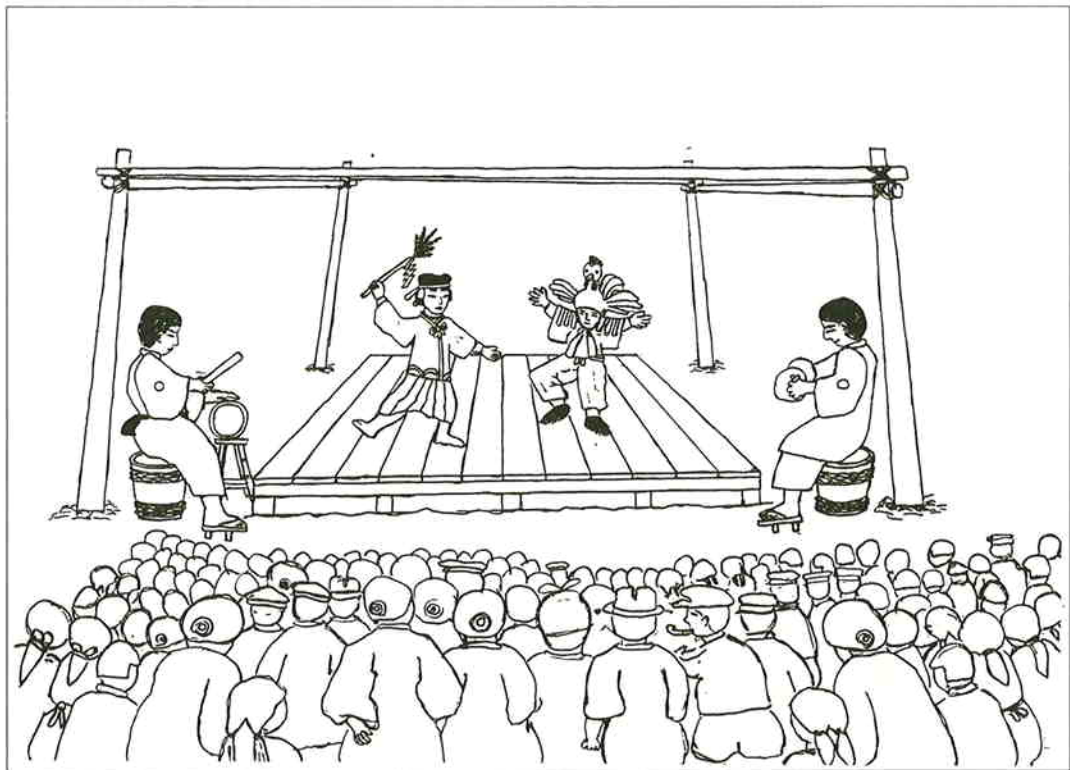
この時、土田シカさんから昔を思い出して牧場の話終ってから、下武士の仙台神楽の話の方に自然に入ってしまった。

土田シカ明治四二年生れ、初貝直一大正四年生れ、

今の大昭寺の西側に。お盆とかお祭りに、神楽をするのに天幕を掛けてしていた。神楽の舞台の四つ角に柱を建てて、小太鼓叩く人が柱の東と西の内側に、大太鼓を叩く人が南と北にいたと思うが、小さい丸い鐘を両手で持って打ち鳴らす人が囃子をし、太鼓叩く人が音頭を取るようなことで、神楽は娯楽のない開拓当時は皆んなの楽しみだった。

土田シカさんの印象に、しし舞いが、ふざ

仙台神楽の全くの創造図です。土田シカさんと佐藤常雄氏の記憶の話から描きました。



けて舞台から降りて来て、子供の頭の上で、  
がぶがぶと口をさせたら、恐ろしくなって泣  
き出す子供がいたが、そうしてもらって泣か  
ない子供は頭がよくなくなるとか言って、しし舞  
が近寄ったら喜ぶ子供もいた。

お姫様の衣装は、私が娘時代（土田シカ）  
のこと、本当に見事に綺麗に見えました。刀  
なんかも今考えたら、芝居のようなことに使  
うにしても、お金がかかっているだろうなあ  
と考えましたよ。

あの神楽も、大昭寺の側で店屋をしていた  
「永徳徳三郎」と言う人が亡くなったら、び  
たりと止めてしまいが、あれは大正の終り頃  
だったと思います。永徳さんが、仙台神楽の  
世話役が何かしていたのでないかと思いま  
すが、私の父は、福島県から来ているが、仙台  
は、近いところ、仙台言葉も懐かしい言葉で  
した。

秋祭りなんかには神楽が始まると。床丹や、  
知来、富武士・上佐呂間のように遠とところ  
からも見に来ていたと父が言っていたが、神  
楽が始まって終るまで、三時間はかかったの  
でないか。

平成六年四月八日、佐藤常雄氏別の用件で  
来て下さったとき、土田シカさんの話をした  
ら、佐藤常雄氏は

「若佐郷土史」作成中にもっとよく考えて  
「わかさの人々」に乗せればよかったね。も  
う知っている人は、本当にいなくなつたな。  
と言われたので、私が「神楽」と言う名のも

のはどんな芝居なのさ」と聞いたたら。

「神楽は、私は本当の根本的なことは研究  
していないが、日本歴史の神代のことを題材  
にしているのではないかなと思うが、あれあの  
天の岩戸に、アマテラスオオミカミが、昔の  
スサノウノミコトの悪行に怒り心頭に達し  
ての岩戸入りしたことを、神楽にしたらしい  
んだ、わしが知っていたのでは、岩戸の前で、  
女の神様が踊っている姿に。朝だよと、昔は  
鶏のコケッコと鳴く声を、時計のように  
夜が明けたら、「あつ朝起きよ」と、起きた  
ように、神楽は、一人の人は、鶏の形をした  
ものを、頭にのせて舞を舞った。神話の、ア  
マテラスオオミカミ（天照大神）の關係のこ  
とはよく僕はよく記憶しているが、あとのこ  
とをわした、誰か知っている人と思ひ出しな  
がら話したら、可成り思ひ出すんだけど、あ  
の神楽も、土田シカさんが永徳徳三郎と言う  
人が亡くなってからやらなくなったと知って  
いるなら、僕（佐藤常雄）の年齢では、三年  
か多くても四年位いしか見ていないね。もう  
六五年か七〇年も昔のことだからね。」

私が「佐藤さん、漢和事典に神楽のことが何  
か書いてないか調べて見るか」「そうだね」  
と言うことで調べたら

〔神楽（樂）〕①神シンガク②靈妙な音楽。

②神の祭に奏する音楽。〔漢書・兎寛伝〕○  
国かぐら神を祭るために奏する舞楽

右の三行に書き写したようなことが書かれ  
ていた。最後に「舞楽」と書かれていること

を考えたら、一種の舞なのだと判つたが、大  
正時代の一〇年過ぎまで、今考えたら、よく  
もこの大昭寺近辺が、開拓当時の農村部の年  
に一回か二回の、娯楽の中心になっていたか  
と世の移り変りのこと、しみじみ感じられる。

仙台神楽について、私（徳永）の個人的に  
考えるのだが、上湧別の屯田兵關係の団体が、  
大昭寺を中心にした地帯に、開拓に入った人  
達の中に、小川喜三郎という方が神主の資格  
を持っていて、学問もある人と聞いているが、  
この人が、仙台神楽の陰の力になっていたの  
ではないかと考えられる。

そうして、佐藤常雄氏に、仙台神楽を舞う  
ことの出来た人知っているだけの名を、記録  
して見たいと言つたら、次のように話してく  
れた。

「師匠が佐藤末吉、女形が僕の父親で佐藤  
友吉、男役が、小野寺忠五郎、菅原達雄・佐  
藤正・佐々木恵七・太鼓叩きが上手だったの  
が、五・六年前亡くなった阿部清吾だった、  
外の人も神楽した人いたかも、これだけの人  
ははっきり記憶している」と、

（注、又余計なこと付け加えるが、佐藤友  
吉という人が女形なら、天照大神の役をした  
のでないだろうか）

語り手 土田 シカ

佐藤 常雄  
小島善之丞

文責 徳永 良行

## 二発の銃声（とんだ宝物）

大正中頃の佐呂間村は、各県下からの入植も、ようやく一段落して、人口も、七千台と増加も横這え傾向にあった時期であった。佐呂間の市街地は未だ、鉄道も引かれず、交通も駅通の馬に頼る時代であったから、商店街も形勢されず、数軒の雑貨屋と鍛冶屋、蹄鉄屋、床屋などの他、今の西沢新聞店の所に喜多美屋という料理店があった。

喜多美屋を経営していたのは、西沢テシオの父の勝次郎で、当時の自警団の組長をしていた。その頃は農耕、荷物の運搬も馬に頼っていて、馬の売買の仲立ちをする牛馬商が活躍した。中山正男の小説「馬喰う一代」の主人公の米太郎のモデルも佐呂間のこの喜多美屋のすぐ近くに住んでいて、この小説の中で、只一人だけ実名で登場する「目腐れ太郎」も馬喰うを生業として、勝次郎の店の道路向かいに住んでいた。

実はこれから書く事件の被害者がこの太郎であった。

喜多美屋の隣には、多田茂一が駄菓子等を売る雑貨屋を営んでいた。

事件が起こったのは、そろそろ、どの家も夕食を終えた頃の夕暮れ時に起こった。一発の銃声が、黄昏の静かな街をつんざき、咄嗟に多田茂一は危険を察して、居間にくつろいでいた妻子に、「伏せろ」と叫んだと言う。

急の招集で自警団員であった栄元治が現場に駆けつけた時には、まだ、被害者の太郎は、意識があり、胸元を鮮血にまみれながら、口から血の泡を吹いて水をくれと叫んでいた。自警団の仕事と言えば、治安維持の警察のお手伝いと言った役どころで、田舎の村では時折、喧嘩の仲裁位しかなかった。

平和な静かな街に突所として降って沸いた猟銃殺人事件に、街中が大騒ぎとなった。直ちに、勝次郎を組長とした自警団が組織され猟銃を持ったまま逃げた犯人の第二の犯行に備えた。

しかし事件は呆気なく終焉を迎える。

二発めの銃声が、遠く聞こえた。駆けつけると、当時の神社のあった前で、犯人は胡座をかいて猟銃を抱え込んで、足で引き金を引いて自殺して果てていた。

栄元時達、自警団員が数人して、そのまま死体の脇きで遠軽の本署から警察が付くのを明け方まで待ったという。

この殺人事件の事の起こりは、

被害者のインチキ馬喰うが原因であった。加害者は仮に名前をTとしておこう、真面目な男で、今の東区を当時は白樺の木が繁茂していたことから、「がんばら」と呼ばれていたがその「がんばら」からある農家に婿養子として入っていた。

太郎の甘口につまみ馬を交換したところこの馬がとんでもない「じゃめ馬」で、さっぱり言うことを聞かない、舅からは小言のがく

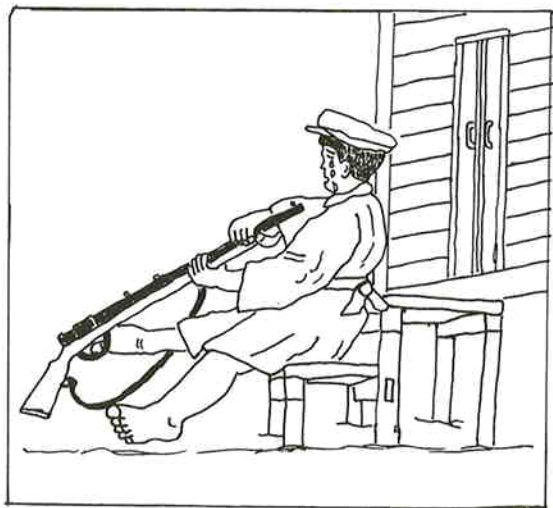
るわで、太郎に随分と談判をするが、柳に風と受け流され、埒があかない。

とうとう腹に据え兼ねて、実家のある「がんばら」の知人から村田銃をかりてきて、太郎の馬小屋に潜んで、餌を与えに出てくるのを待ち構えていたのであった。

この事件、被害者より加害者のTが街の人々の同情をあつめたそうである。

さてこの、佐呂間の歴史の中で唯一と言え

る殺人事件に、後日談がある。犯行に使われた銃であるが、実は勝次郎のもとに永いあいだ保管されていたと言うのである。事件が一段落したあと、自警団の組長をしていた関係から、警察から凶器の保管を



頼まれた勝次郎は、内心、快しとはしないながら、銃をあづかる羽目になってしまったのだそうである。

この勝次郎であるが、長野県の出身で信州大学の法学部を卒業して千葉県下の税務署に入り、その後、北海道に渡り天塩で森林監視をした後、佐呂間で料理店を始めたという人物で、自治会長を努めるなどの人望もあり、西沢ならと言うことで、そうした成り行きになって仕舞ったのであろう。

猟銃は銃身を切られて、その後、永い間、西沢家の何処かに隠されていたのは、確かな話の様である。

家宝ならず、とんだ厄介物をあづかったものである。

語り手 西沢テシホ

栄 元時

香川 すえ

文責 上伊沢 洋

## 耕馬を家族の

### 一員にしていた開拓者

私は、大正一二年生れだが、昭和元年（大正一五年）の大凶作の思い出を持っている。

満三才のときの秋のこと。色々と、当時の個人の思い出をくどくど書いても、誰も信じたくないと思えますので、そんなことはどうでもよいと思えますが、昭和の元年の年、から昭和三年の年まで、このイラストのように、一つの家の屋根の下に、我が家の大事な機動力だが、汚いと言ったら汚いのです。糞便を、居住部屋に垂れままの家族（家畜耕馬）現武士部落にあった記憶を持っています。

この「さろまむかしむかし」を読んで下さる方に、私共の先人の様々な人達の、このよくな生活姿も、私は記録に残したいと考えて、と言うことでこの頁に掲載しました。

文責 徳永 良行

